

3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの栽培管理	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○デルフィニウムの栽培管理 ○ばらの冬季の温度管理 ○シクラメンのは種 ○花き類の防寒・省エネ対策 <p>—切り花—</p> <p>9月中旬に定植した‘さくらひめ’等のシネンシス系デルフィニウムの生育ステージは1番花の開花期になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>採花中は少量のかん水とし、土壤表面は乾燥気味とする。80%程度採花後は十分にかん水し、土壤を乾かさないよう定期的にかん水して2番花の萌芽を促す。</p> <p>施肥は1番花の収穫が終了した時点で有機配合肥料（窒素成分5～6 kg／10 a）を施用する。</p> <p>イ 温度管理</p> <p>生育を促進させるため、夜温は10°Cを確保する。昼温は25°Cを目安に管理し、側窓換気や循環扇を活用して植物体に風を当て、高品質切り花に仕上げる。</p> <p>ウ 採花、出荷</p> <p>採花の目安は、全体の70～80%が開花した頃である。採花後は速やかに水に漬け、萎れを防止する。</p> <p>花散り防止のため、エチレン合成を抑制する前処理剤（STS）を使用する。</p> <p>段ボール箱での出荷時は、萎れ防止のためエコゼリーなどの給水材を利用する。</p> <p>—鉢物—</p> <p>‘さくらひめ’は草丈が伸びやすい特性があり、鉢物用として草丈50 cm程度に仕上げるため次の点に注意する。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>日照量が多いと萎れやすいため、乾かさないようにかん水する。肥料が切れると葉が黄化するため、IB化成肥料を4号鉢で毎月3粒/鉢施用する。</p>

項 目	作 業 内 容
(2) ばらの冬季の温度管理	<p>イ 温度管理及び摘心</p> <p>○10月下旬に4号鉢に定植し3月に出荷する作型では、地際部より1cmの高さで摘心し、12月より最低温度5°Cで管理する。</p> <p>○4月に出荷する作型は、3月出荷用と同様に摘心して無加温で管理する。</p> <p><エラータム系></p> <p>9月下旬に定植した‘パルフェライトブルー’等のエラータム系デルフィニウムの生育ステージは1番花の開花期になる。</p> <p>ア かん水、施肥管理</p> <p>かん水、施肥管理は‘さくらひめ’に準じる。</p> <p>イ 葉かぎ</p> <p>発芽期からは、次の芽の分化・発達を促すために徐々に葉かぎし、株元に光を当てる。最終的に、地際部から15~20cmの高さは葉かぎする。</p> <p>ウ 温度管理</p> <p>花茎の伸長を促すために、夜温12°Cを確保する。昼温は25°Cを目安に管理し、側窓換気で植物体に風を当て、高品質切り花に仕上げる。</p> <p>エ 収穫、出荷</p> <p>全体の70%が開花した時に採花する。採花後は速やかに水に漬け、萎れを防止する。</p> <p>花散り防止のため、エチレン合成を抑制する前処理剤(STS)を使用する。</p> <p>ばらの好適温度は品種によって異なるが、夜温は16~20°C、昼温は23~27°Cを目安とする。実際には複数の品種が同一温室内で栽培されているため、夜温18°C、日中25°Cの温度で管理すると良い。</p> <p>多くの品種は、夜温が16°Cより低くなるとブラインド枝(蕾をつけない枝)の発生増加や、到花日数が長くなり収量が減少する。さらに、低温下ではブルヘッド(花の中に花が咲く)やブラックニング(花弁の黒色化)等の奇形花が発生するため、適切な温度管理に努める。</p>

項目	作業内容
(3) シクラメンのは種	<p>中鉢（5号鉢）で、翌年の年末出荷を目標とする場合は、12月中には種する必要がある。は種には200穴のセルトレイを用い、用土は市販の培養土（メトロミックス、プラグミックス等）を使用する。</p> <p>種子は、次亜塩素酸ソーダ5%に3時間浸漬する。消毒後、一昼夜流水洗浄処理してセルトレイに1粒ずつまき、5mm程度覆土する。</p> <p>シクラメンの種子は嫌光性であり、発芽まで暗黒条件下で管理する。は種したトレイは数段に重ね、シルバーポリ等で被覆する。発芽適温は18(15~20)℃で、は種後25日頃から発芽する。なお、25℃以上の高温条件下では発芽障害が起こり、10℃以下では発芽率が低下するので温度管理には十分気を配る。</p> <p>発芽を確認後、被覆を取り除いて、セルトレイをベンチに広げる。寒冷紗下で1週間程度順化し、最低夜温15℃程度で管理する。</p>
(4) 花き類の防寒・省エネ対策	<p>急激な寒さに備え、施設栽培における防寒対策は次の事項を参考にする。</p> <p>ア 温室を総点検し、補修と目張りを行う。内装カーテンは二層被覆とし、放熱を防ぐ。ただし、気密性が高まると湿度も高くなるため、べと病や灰色かび病の発生に注意する。</p> <p>イ 寒風が植物体へ直接当たらないよう、温室の風上に防風ネットを設置する。</p> <p>ウ 温室内の北側側面や妻面等、日射の影響が少ない壁面に光を反射する資材を設置する。これにより隙間からの放熱を防げ反射光を有効利用することができる。</p> <p>エ 温度ムラを少なくするために、循環扇の設置や温風暖房機のダクトの配置及び風量を調節する。</p>

(作成 農林水産研究所)